

孝山紀談

十九

和書門類	四二三〇一	二二九	一七
函號	二二九	二二九	一七
架	二二九	二二九	一七
冊	二二九	二二九	一七

和書類	四二三〇一	二二九	一七
函號	二二九	二二九	一七
架	二二九	二二九	一七
冊	二二九	二二九	一七

第一

内閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 (6)
函號	170 49



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



Kodak, 2007 TM: Kodak



- 一 鍋島神原嶋原城先登の事
- 一 黒田勢方天草丸を攻破る事 并 黒田睡鴻武畧の事
- 一 水野勝重父子有馬永純本丸一番兵を論せし事
- 一 陣佐右多一揆の長四郎が首を取る事
- 一 松野亀右多鉄炮修煉の事 附 松野才覚の事
- 一 藤堂高虎阿濃津よく勢揃せし事
- 一 福島正則領國を召放し始末の事

常山紀談卷之十九

備前國 湯淺新兵衛元楨輯録

○細川忠興と曾の物まじをいふ小せばうといふ方のあつた小評は
 書きしるし、使まのえらまきりり使立物の下地桐北本におき
 ころハ折やまきりりのあつたいふらんといへば忠興色をまど
 汝ハ弓箭取の使とも覺るぬまきり軍は陰む者難う生てぬん
 とよあまきり二つあつた命をよまきり何条立物の折るを厭ふまき
 かろつたそよまきり立物の折るむりりは働たさへ何のんごり
 き事あへんひと面目よそそあまきりといふまきり

天正元癸酉年七月信長後イナガキの城を攻落されし小岩成主イナガキ税助
 を細川藤高フナタカの士下津持内シモツツ打取し時忠興トキタカ八ヤチの年あつた

長岡監物が肩負のりく監物が立物鹿の角小るつき見物て
奥に入らうりくを人見く後年のけさたをわしをうりくを

○細川忠興豊前よちうの時同州竜王の城又飯河豊前宗祐禄二千
石岩石の城又長岡肥後宗信禄六千石宗祐の子寵せくまきく

長岡の姓を与へらまうり小父子とも罪有く其の長十年七月廿一
日二人とも誅せく宗祐ハ河北石見逸見治左衛門を討多し宗

信ハ増田藏人を討多しせく宗祐散多小戦ひく死傷多し宗
信が妻ハ米田助右衛門是政が女あり宗信と睦くく対面せく

事三年よ及べり忠興是政が後室の尼雲仙院といふをよび
て豊前肥後罪有く誅せくといふも汝が女と孫の女は罪なり

密に告知せく命を助けくあり後室の尼すく肥後が妻常

小中より然まきども夫をすてかかるとは得そ

存まされど仰の希きをば告やさんと文しく告やりけ

まば誠し仰ハ希きまき今ハのきハ夫をすて道まん事

又道よあは女子ハ東西をとりたえざる若あるまば養育して後

のまきく使まつけく尼のりく送りく宗信是をすて大い悔

と我過を謝し終ふ共又自害しりり

○黒田長政の嫡子満徳丸とく四の歳袴着の祝ひの母里但馬ハ
ひき目親めく常よぢいとあつまうり其時但馬満徳丸の髪を
かきたてく成長しく功名し父上ありよくまきく

ハ長政何とりのそや我武畧をまきく若き時ハ汝又備後
果とも相謀りき朝鮮よとく又関ヶ原の合戦も皆汝を扶
山

小よ〜大敵に勝つ〜其後世太平あるもバ立べき武功なり！
満徳いふよわりのゆゑも我を越る事存も〜但馬か〜向ひく
を〜汗を流さ〜但馬か〜向ひく
故あき怒りぬ人の子に功名〜と云ハひが事うと〜物ともせ
ざる体ゆく長政北方を〜長政いや父よりま〜ハ
いふと怒ら〜但馬か〜心を静め〜武功ハ
度事よあひ〜仕〜度〜不足
あ〜若よん他人ハ〜と褒〜も黙〜
よた軍兵を引具〜地の利よく幸は勝〜と自讃ハ以外
のひが事〜今まで勝軍ハ〜毎度斯のめく
らん〜必敗北あ〜味方崩〜時一足も〜討死

ハ殿の得りれなり其ハ大将の道よ〜味方を討せ軍
ハ勝を長将〜殿の武畧進む一途ハ得〜
進退圖ハ中〜途ハかけ〜此是非の論ハ備後老
功の老あ〜間時〜満徳との只一人かけ出討死
する事ハ葉武者の業なり死ぬや〜小軍ハ猶を大将のそこ
よハ〜事よん此詞よく覺〜とよ〜能〜と髪を
か〜長政の怒を〜思らぬ〜備後守次の間
小酒宴〜有〜鉦子か〜け取拵〜出長
政の前〜跪き〜俾も顧望す〜盃を〜若た
時如水公の小姓〜御酌ハ〜小笠原の礼
義存〜酒をす〜長政う〜盃を〜

おけらまうらふそまを但馬に賜はりしとて氣ちがひよそれ
罷出よといひまきバ但馬すみより其盃を戴きて三度引
らけ飲て後殿ハよゝあたよ怒りまひ今日の祝ひは奥さめ
ひ少一酔めへといひしバ長政も又盃よ十分引受られし時
但馬のよ者よとて田村をうらみ舞しまゝしり鬼の
如くたなる男に誓古せし拍子も耳目を驚りせり昏一
兵のまどひりしとて酒宴盛なたりけれバ備後守高
小若き人々能く心掛の深たも殿又思慮たれも殿あり
大らけハ但馬又まのりしハ但馬なり思田の家ハ武勇
目出度時とよとて酒を酌らる事有ん時鎗を合せ
たゞ事ありしハ何事もゆゑのぞ人とうてや

舞やとて酒宴をてりり又長政或年の春歳初の祝に栗山
備後まがめし行まうら酒宴あり四比よ及んぐ長政はれ
居しハ若き老も酒あり得飲にあとておとけ
酒のりせよとて歸らるし但馬今少居る若たのたよ
懇し詞をうけ人々悦ぶやとて有る事とかく我まの
たぬ殿なり頂よ大なる灸をうてとてやうためと大音
ゆく云しを長政ゆめ体よく歸らるり

○江戸の石壁をきりし時浅野長晟仰を奉りて亀田大隅
高綱を奉行し石壁成て後出する事三度よ及べり
台徳院殿おぼし御覽とて何とて崩ししやと仰有し小
阿謹で其事よ大隅軍の時鶴比嘴の鎗を授け先づけ

劍術ハいさある人も及びく倒さるハ天の興へなりあ
を切らざるハ虚を打の理よりくくもいさあるやと云ふ
太田仰誠は辱くくはくく一ツ存る故のハ多く敵の倒るるを
おろしも立むおんとするは身忘れ脚を切らる倒る
く者勝たりのハ倒るは虚実の二ツを吉岡が倒るハ
虚より吉岡よりハ実より倒るはもきややく斬る累
あはれ傷まらぬハ身を防く事虚は似てはくも近付あは
切んと存るハ実あはく虚も実も倒るはのハ立あは
ぬといわゆるハたのく其立あはる時ハ躬を防ぎ敵をま
らんと存る心虚はありはくを打くきやく切ら
ゆ手誠よかる小き業匹夫の事あはく殿の志らるめは理よ

ていさある陣をくく軍する道をも相うたひん
事りやと憚を省むくくやあはくハ勝重大小感せ
らぬ

○柳生但馬守宗矩ハ大和國あはく世々柳生の庄北地頭あり
関ヶ原の戦後徳川家仕へなりく父より劍術を受傳へ金
双の妙手とすまてなり 大猷院殿御年こくくありより
此技を好ませるハ宗矩御師範よりありく御心を盡させまひ
頗其妙を得させまひなり只此藝小ありく其人を信ト敬
させせめなりハくく小実ハ其技よりくく治平の政
事を喻しゆくハ常ハ御側の人より天下の治めハ但馬
守ハ學びてく其大体を得くく仰られくく

宗矩^{ムネノリ}年老^{ナヲシ}病重^{ヤミヒオモ}なり。自ら^{カミチ}辱^{カミチ}くも家^イに入^イせむい^キ正保三^{シヤウホウ}年三月終^{ワケ}に空^{カラ}しくなり。其^{ソノ}後^{ノチ}も家^イに入^イせむい^キ贈位^{ソウイ}の事を執^{シツ}り仰^{オウ}られ從四位下^{ジュウシノノゲ}に降^カげさせむい^キや宗矩^{ムネノリ}死^シせし後^{ノチ}事^{コト}のあましく生^ナく世^ヨにあ^ハば尋^タ問^トべきものをもと深く^{フカク}とせしを仰^{オウ}らま^シハ誠^{マコト}は有^{アリ}ざる事^{コト}なり。其中^{ナカ}一事^{ヒトコト}相傳^{アイヒツタ}ふハ鳩原^{トビノハラ}凶徒^{キヤウト}の乱^{ミダ}江戸^{エド}はゆま^シハ頃^ヨハ十月十日^{ジュウグツニチ}に宗矩^{ムネノリ}有馬^{アリマ}玄蕃^{ゲンバ}頭^{カミ}豊氏^{トヨウジ}の家^イに散樂^{サンガク}有^{アリ}く行向^{ユキムカ}ひし家^ケ隸^{ライ}の事^{コト}も但^タ馬^{ウマ}を呼^{ヨビ}出^{イダ}し肥前^{ヒセチ}國^{クニ}鳩原^{トビノハラ}に土民^{ドミン}相集^{アイヒツ}ま^シく楯籠^{タテコモ}りしはぬ是^{コト}切支^{キリシ}丹宗門^{ニシウモン}の者^{モノ}少^{オホ}く松倉^{マツクラ}よそむき^シての事^{コト}なり。早馬^{ヤウマ}来^キり板倉^{イタクラ}内膳^{ナイゼン}正追討^{シヤウツイタク}の御使^{ミツギヒ}を承^{ウケ}りしは法護^{ハツカウ}向^{ムカ}ひしとぞ。宗矩^{ムネノリ}さ^シぬ体^タめ^メく^シり^シの事^{コト}も歸^カり^シ用^{ヨウ}人^{ニン}に向^{ムカ}ひ^シる^{コト}也^{ナリ}。

宿所^{シュクショ}に歸^カる^{コト}も事^{コト}のあ^ハぬ^{コト}も御馬^{ミウマ}をか^カへ^シて^シり^シバ心得^{ココロエ}ず。ア^シとて馬^{ウマ}小鞍^{コカサキ}置^キく牽^{ヒキ}し^テ宗矩^{ムネノリ}お争^マく品川^{シナガハ}にせ付^{セツ}板倉^{イタクラ}ハ如何^{イカ}も^ト問^トハ遙^{ハルカニ}よ^クる^{コト}也^{ナリ}。吾^ワふ川^{カハ}邊^{サキ}に池^{イケ}も^ト問^トハ二三里^{ニシ}も隔^ヘり^シと^シり^シ日^ヒ已^マに暮^クる^{コト}及^ツべ引返^{ヒキカヘ}し^テ御城^{ミシロ}小あぐり^コ近侍^{キンシ}の人^{ヒト}々^々を以^モて^シべき旨^シも^ト伺^{ウカ}候^{ウケ}し^テは^シぬ^{コト}也^{ナリ}。やがて御前^{ミゼン}に召^メく^シ何事^{ナニコト}やと仰^{オウ}有^{アリ}宗矩^{ムネノリ}畏^{オソ}り^シ只今^{タラシイマ}兼^カり^シハ九州^{クシュウ}に切支^{キリシ}丹宗門^{ニシウモン}の逆徒^{ギャクト}發^{ハツ}起^キし^テ内膳^{ナイゼン}正追討^{シヤウツイタク}の御使^{ミツギヒ}を兼^カり^シませ^シ向^{ムカ}ふ^{コト}也^{ナリ}。仰^{オウ}せ^シ稱^{ナヅケ}し^テは^シぬ^{コト}也^{ナリ}。追^オつ^テは^シぬ^{コト}也^{ナリ}。此^{コノ}よ^クヤさん^{ヤサン}為^タなり^シと^シり^シ何故^{ナニケ}に^シぬ^{コト}也^{ナリ}。その御^ミ尋^タあり^シさん^{サン}君^{キミ}ハ^シぬ^{コト}也^{ナリ}。その土民^{ドミン}は^シぬ^{コト}也^{ナリ}。宗門^{シウモン}に付^ツく^{コト}起^オす^{コト}軍^{イクサ}ハ

大事のゆゑに重昌一定討死仕りべしと云ふも
めむやと存りひりしに以の外御氣色損ナ御座を立
まふ宗矩に夜あつても退出せざれば此より宗召又御前召
く重昌討死すべき子細いごと御尋あり宗矩さればこそ
兵の道ハ勇を先とし勇士ハ死を悲し三軍を恐まざる
ハ今の名將ハ專一とする事よらん凡愚の輩宗門を汚く
信ト其法をかきとちりく死を以て身ハ悦とて百千の人死
を恐ぶるの勇士とありん事ハ宗門のあつてこそは織田家
の武威を以て一向門徒ハ勝事能は天子の命を假く和平
よありりひぬ三河國の一揆も近き御家此事あつてこそは大阪
此時重昌年ころりりども数十万人ハ撰バも唯一人大事の御

使兼りし者あまは是等の士民打亡はべきは何事う有べた
難クハ其下知を膏くべたと思召しんハ事の違ひ多かり
重昌位高く禄も有り年頃重き職を司つて常人の敬ひ
いんハ然るべくん今の重昌が身ゆく城を攻めひるん西國
の諸侯いざハ下知に従ふべきわりのあつと似せ攻あつていひ
なんえ又御一門の人とらさるゝ宿老の内重の追討の
御使下さるべしと云ふハ重昌何の面目ありて生て再び
関東よゆべきに人を土人ぞふ打せりひん事誠ホ口
惜くそは是ハ御家の恥辱もやんを御母を蒙
ていれ追付ありてとかく押へるめく具して歸すべき物を
と憚るあつて御後悔の色あつてをせりい

そまも叶ひごとくや思ひ召らん夜も更しりごとく入せしひ
しがバ宗矩も退出しひそらん人ふかくと語りしりごとくや誠
宗矩が計あり事掌をばばごとくかりしりごとく尤深計遠慮
ありしりごとくやま

○嶋原ゆく寛永十四年切支丹一揆の時討手は石川主殿頭忠
綱板倉内膳正重昌なりと云くを石川ゆく我年老し
板倉其器は當りしりごとく重昌仰を奉り肥前は
趣き城落おりしりごとく又討手の大将を下さるしりごとく石川
ゆて我始ハ其撰ありん事をさめ悦ばざりた今思ふは義軍
の世は徒に死んも志は悲しあをれ仰を奉りしりごとく西國は趣き
やしりごとく重昌筑紫は向ふ討京都して所司代板倉

周防守重宗は對面ありしりごとく今度の仰を承り事
らまかり重昌既は京都を立ち後重宗重昌がかりしりごとく察
しりごとく不必討死しりごとく再命をまてたりしりごとく松平
伊豆守信綱肥前は進發せしりごとくゆき重昌城を攻て討死
せしりごとく人重宗は其いれをり重宗城はりしりごとく老
百姓の身ある故に内膳正忽攻落しりごとくと思へるをありしり
ましりごとくしりごとく此城を攻落しりごとく一揆の奴原さめ功
名しりごとくしりごとく只今四方無事の時一揆をばりしりごとく城
龍ありしりごとく降参すしりごとく悉しりごとく殺しりごとく人事を
知りしりごとく其心
一和しりごとくしりごとく落へしりごとく日数をばりしりごとく又他の大将を
指向しりごとくしりごとく内膳何ぞ生てゆべき吾是を以て討死せ

人事を知ぬといふれり

○細川忠利カハタケの士川北カハキタ九大夫といふ者あり川尻カハシリの代官ダイカンを勤めよと
なりし出陣シラサゲの時供トモよ連ツラシらるるば代官ダイカンの職シムつゝむべしといひ
くまは元モトモとて出陣シラサゲの時供トモよと定めし天草アマクサハやもす
まは一揆イチゲキをあらんと西國サイコクの人れいひける事なれば心あけて
川尻カハシリハ海カイを船フネの着ツく知チりて細川家ホシカゲの采藏サイサウあり天草アマクサハ海上カミウミ
七里セリとゆ川北カハキタ兼カミく地鉄炮ヂテツポウの教カサをあらへて
草クサの一揆イチゲキ起タるとゆ川尻カハシリの海岸カイガンは一間イツケン一本イツポンづ竹タケを立タテせ
一本イツポンづ火繩ヒナヒをゆひ付ケ五本イツゴは一人イツニンの地鉄炮ヂテツポウを配ケりて後ノチハ
天草アマクサ中ナカく生イケらるる老コのいひけるハ其夜カハシリ川尻カハシリの采サイを取トル
為タメに船フネを打ウちしりて川尻カハシリはいつてもなく鉄炮テツポウを備ツク

見えぬ故にハ熊本クニモトより軍兵イクサウのとも川尻カハシリ来キまらり
船フネをりり川北カハキタなりせば川尻カハシリの采サイを取トル
天草アマクサの城シロを破ヤブる事トありし川北カハキタが謀カウめりて天草アマクサ
の糧カシを奪ウバひしりり

○天草アマクサの一揆イチゲキを圍カキ攻セらるる城中シロナカ糧米カシイネ既トモに乏トボしくなれば
夜討ヨウチし米コメをとんと本田ホンデン但馬タマが謀カウめりて先マ練レン早口ハヤクチの堀ホリの
外ソトに水ミヅを汲ヒせり時鉄炮テツポウをあらへて空手クソテにあらりかすも
事コト三度サンダ及ツ後ノチハ漸ヤカク々ヤカク遅オソクく夜ヨに入イり汲ヒせり是コレハ夜ヨ
討チし時の鉄炮テツポウ火ヒを見咎ミヤめさせりとのりて其ソノ後ノチ毎マ夜ヨ
堀裏ホリウラ中ナカく切キ支丹シタンれりて天帝テンタイといふを数千スズケン人ヒト一同イツドウハ
をめぐりてお付ツけし物音モノネをきりて八ヤチさんサンとの謀カウめり

かゝく寛永十五年二月廿一日の夜五百人をのりて黒田忠之の陣所よりしよせ二陣の兵二千人を二手よ分ち繩をきりて額よハくもすを鉢巻よしく相辞ハ九ウ九と定め首あつを食物をとり来るを第一の功名ふせんとして下知し諫早口よりゆく出郭のかゝる有江口へ退入せしと定め陣屋を焼ん為小槍の本を削りけりしと腰よさうせ丑の刻をり月もあぢらふらうしを便小黒田の陣所より押多同時の候の声をあぶきバ城中も関のあつとわらひ士大将黒田監物志よりぎらまわりて父子ともね面もあぢ支へ戦ひしが流し矢ふ中より討死しし者バ従兵四十三人枕を並べ討死せり一揆大少勇と進しし者も黒田美作入道睡鴉扱しし者も柵壊きり

の守りかゝりきあらふ中に黒田市正高政鎗を授けあひ三人突伏せ小姓は首をせし市正も一足も引なきをたふすもいせ六軍神も照覧あき斬り捨るごとく呼ばあつを一揆せ爰ハ破りし寺澤兵庫頭忠高の陣所より進み三宅藤右進支へ我ひ痛も負し一揆又鍋島勝重の陣所北井樓小火をかけしし者松平信綱より夜廻りの士岩上覚之次尼子八郎吉衛紀州の使者山中作右衛門と打連て来りし山中ハ銀の曹少く十文字の鎗をたさんし相戦ふ鍋島の軍兵馳集り入りしと防ぎし者竹把し火のえ付く日めめく一揆かなとてしし時四郎矢倉よ有て勝岡をつくせそまらり城中静まりたり其後水野日向守勝成備

原^{ハラ}は黒^{クロ}田^タ陣^{ジン}鷗^ウは夜^ヨ討^{トク}の有^{アリ}様^{サマ}か[〜]せ[〜]す[〜]く[〜]ひ[〜]り[〜]あり
四^シ方^{ハフ}を固^{カタ}く取^{トル}ま[〜]る[〜]も竹^{タケ}把^ヅを付^ツ柵^{サク}の木^キ二^ニ重^{ジュウ}三^{サン}重^{ジュウ}よゆ[〜]ひ[〜]る[〜]雲^{クモ}手^テ
の陣^{ジン}は討^{トク}くゆ[〜]る[〜]事^{コト}を聞^キべ古^コ今^{イマ}無^ム双^{スウ}の武^ブ畧^{リヤク}を[〜]一^{イツ}揆^キ
さ[〜]ま[〜]り[〜]も一^{イツ}揆^キを[〜]一^{イツ}名^ナ超^{コエ}て[〜]た[〜]る[〜]ハ日^ヒが士^シ卒^{ソツ}なり[〜]と云^{イハ}ふ[〜]り
○同^{ドウ}小^コ城^{シヨウ}攻^{コウ}は鍋^{ナベ}嶋^{シマ}の志^シより堀^{ホリ}二^ニ三^{サン}間^{カン}を[〜]り[〜]小^コ竹^{タケ}把^ヅを付^ツま[〜]せ[〜]軍^{ジュン}
兵^{ヘイ}ひ[〜]と押^{オシ}寄^{ヨセ}居^イる[〜]小^コ城^{シヨウ}中^{チュウ}殊^{コト}の外^ノは静^{シヅ}か[〜]ま[〜]バ[〜]ひ[〜]そ[〜]う[〜]小^コ堀^{ホリ}の
内^{ウチ}を[〜]さ[〜]の[〜]ぞ[〜]見^ミる[〜]小^コ一^{イツ}揆^キ一^{イツ}人^{ニン}も[〜]な[〜]し士^シ大^{ダイ}将^{ショウ}鍋^{ナベ}嶋^{シマ}安^{アン}藝^ギ是^シを
聞^キ堀^{ホリ}裏^{ウラ}を[〜]り[〜]の[〜]ぞ[〜]其^{ソノ}有^{アリ}様^{サマ}只^{ただ}今^{イマ}攻^{コウ}入^{ニル}べき[〜]り[〜]も[〜]な[〜]り[〜]く[〜]バ
あ[〜]や[〜]と云^{イハ}程^{ハジメ}こ[〜]の[〜]あ[〜]も[〜]我^ガ先^{サキ}よ[〜]か[〜]け[〜]集^ツる[〜]鍋^{ナベ}嶋^{シマ}の陣^{ジン}小^コ附^{ツケ}
ま[〜]し[〜]神^{カミ}原^{ハラ}飛^ヒ弾^{ダン}守^{モリ}のま[〜]も竹^{タケ}把^ヅを付^ツ習^{ナラ}ふ[〜]と[〜]毎^{毎日}日^ヒか[〜]ら[〜]く
小^コ来^キア[〜]ら[〜]は[〜]是^{コト}を[〜]ん[〜]く[〜]い[〜]ふ[〜]の[〜]小^コ押^{オシ}寄^{ヨセ}る[〜]神^{カミ}原^{ハラ}の嫡^{チク}子^シ

左^サ衛^{エイ}門^{モン}佐^サ真^{マコト}先^{サキ}か[〜]け[〜]く[〜]乘^イ入^{ニル}る[〜]も[〜]巴^ト戸^カ田^タ左^サ門^{モン}氏^{ウヂ}鐵^{テツ}の陣^{ジン}所^{トコロ}は諸^{シヨ}將^{ショウ}
集^ツま[〜]る[〜]軍^{ジュン}評^{ヒョウ}定^{テイ}ま[〜]る[〜]對^{タイ}あ[〜]る[〜]小^コ井^イ樓^{ロウ}より鍋^{ナベ}嶋^{シマ}の軍^{ジュン}兵^{ヘイ}只^{ただ}今^{イマ}城^{シヨウ}
に攻^{コウ}入^{ニル}ると[〜]い[〜]ふ[〜]さ[〜]う[〜]バ[〜]と[〜]く[〜]諸^{シヨ}將^{ショウ}陣^{ジン}を[〜]ま[〜]る[〜]攻^{コウ}落^{ラク}され[〜]る[〜]
其^{カミ}後^ゴ勝^{カチ}重^{ジュウ}小^コ今^{イマ}度^{タク}軍^{ジュン}令^{レイ}を[〜]背^セき[〜]城^{シヨウ}攻^{コウ}有^{アリ}事^{コト}を[〜]問^トふ[〜]小^コ勝^{カチ}重^{ジュウ}美^ミ
と[〜]神^{カミ}原^{ハラ}父^フ子^シ先^{サキ}か[〜]け[〜]て[〜]乘^イ入^{ニル}る[〜]ハ目^メ附^{ツケ}を[〜]討^{トク}せ[〜]く[〜]叶^カふ[〜]と[〜]
不^フ意^イに攻^{コウ}入^{ニル}ると[〜]い[〜]ふ[〜]神^{カミ}原^{ハラ}は[〜]問^トふ[〜]小^コ嫡^{チク}子^シあ[〜]ら[〜]る[〜]若^{ニガ}き[〜]奴^ヌ軍^{ジュン}令^{レイ}
を[〜]忘^{ワス}ま[〜]し[〜]先^{サキ}か[〜]け[〜]る[〜]を[〜]恩^{オン}愛^{アイ}し[〜]ひ[〜]く[〜]子^コを[〜]眼^{ガン}前^{ゼン}に[〜]付^ツせ[〜]ら[〜]て[〜]ハ
生^イぐ[〜]ひ[〜]なり[〜]父^フ子^シハ同^{ドウ}罪^{ザイ}と[〜]存^{ゾン}づ[〜]い[〜]く[〜]攻^{コウ}入^{ニル}ると[〜]い[〜]ふ[〜]も[〜]こ[〜]れ[〜]を[〜]
鍋^{ナベ}嶋^{シマ}も神^{カミ}原^{ハラ}も門^{モン}を[〜]と[〜]ら[〜]く[〜]お[〜]ひ[〜]込^コめ[〜]二十^{ニジュウ}日^{ニチ}も[〜]御^ミゆる[〜]され[〜]
り[〜]勝^{カチ}重^{ジュウ}人^{ニン}は[〜]あ[〜]ら[〜]る[〜]小^コ筑^{ツク}紫^シゆ[〜]く[〜]卒^{ソツ}勿^{ムツ}忽^{コツ}の城^{シヨウ}攻^{コウ}せ[〜]罪^{ザイ}も[〜]じ
給^{タマ}はり[〜]吞^{ツク}ま[〜]す[〜]の[〜]い[〜]を[〜]ま[〜]り[〜]は[〜]江^エ戸^ドあ[〜]ら[〜]る[〜]城^{シヨウ}攻^{コウ}の卒^{ソツ}勿^{ムツ}忽^{コツ}人^{ニン}よ[〜]と[〜]

勝重の通らざるを珍しむ小觀するともなり又柳原やされぬ
ハ若き者どもに竹把の付やう習せせ度以攻口四五間分ち
とまてたるり皆とていひと云々ふ勝重や入びり
攻口を人ふこと事やある一寸も叶ふまじと答へらるふ柳原
とひらまじりバ飛州の士をこが士たよさう加へらまよとい
まじり此時一丈やもとけらるバ領地を削らるべきやう議
りりるふ勝重の遠き慮なりとあは其事やみりり人々
いひけること

○黒田忠之天草丸を攻む時本田但馬きびしく防ぎ支へて先
陣攻入得ざりしバ忠之直もさう進まざるを黒田
鷗物具持むきりぬとハヤせと大軍を下知りぬ

甲を忌むればう後とて人の嘲アムべしといひる
忠之物具とて肩さけ曹をバとてぬぐひて鉢巻
走り出さるも年比吾家の恩よみちし奴原くハいふ
く進まざるやこれ此處を一足も引まぎてく鎗の鐙を地
まじり折しきくすめ老茂と下知せしる雨の如く
出は後炮よ打せとあられと入り睡鷗ハを余所り
見えい居るバ忠之何とて一方を下知せしるや年老
老茂しとて大音あげ齒がくく罵られしるも
騒ぐばいまじりやとていふバ忠之いみじく怒り罵
りしるを第市正彼入道ハ物しやとてせられしる
西又睡鷗つと立上り麾を取るかかりしとて朝の下より軍

わもものた敷千人を限とせひ定め防ぎ戦ひくまは討
者多し 鎬島の軍兵ひるみく刃を水野父子横す
又面もあつて切りて三の丸より本丸へ逃入一揆を討取
敷をもち本丸の石壁より打ち鉄炮の玉霰の飛ちるが如し
石壁ハ五間七間半も高く登り兼く水野父子大音
あがく今日本丸を攻ぞす人生を難より面を向べき死やくと
あつて不呼はりうても射てもひるまは日先ゆく攻が
旗奉行神谷空之丸旗十本の内一本持せ来りく自竿少を
かけ本丸入んとは統奉行進藤七兵衛小野田正吉夫金の
束の丸馬印をありかたげ来りく松の丸は押立くバ神谷
も旗を入水野父子の兵念なく石壁を登り本丸攻入ると

勝成二の丸より見やりくコま今生のどひ出たり美作ハ大
坂ゆく武功あり伊織ハくを始め此軍ある本丸を攻取
事家の面目なりとよはるま有り有馬左衛門佐康純乃
嫡子藏人永純ハ寺澤忠高の後陣なり唯一人従者又鎧
をもち寺澤の先陣をかけぬけく天草丸の方へをせ入本丸
小進んで五間半の石壁を登り今日本丸の一番乗有馬藏人
あつて心ある士ハよく見れへと呼ぶ如し勝重ハ士鈴木半之丞
く首を石壁の上より置く息を継居るが此声をきく鎧を横
く藏人よ向ひ只今こま来り一番ハ何事をや本丸を水
野美作守攻入旗馬印入置ぬ二番とたのバ是へ上らせりへと
く藏人あ入りらまは唯一鎧もあつてある上の水野

の旗本丸一建一を丸くはらば義作守ふつゞきて八藏人あり
といひまじらば其時鈴木半蔵義作守父子の外大将より
はいまじらば本丸丸一八丸えいばまじらば二番まで外とて
石壁よりあぐらふ永純は丸一の遠ひの處より進み義作守
ハいづくふやと向ふ神谷義作守ハ腰郭北上小居く爰小旗を入
と答ふ永純聞てさてハ義作守ハ我より後ゆくをあれとい
まじらば永純本丸を押し入りと勝重やく使をきて只今攻入
らまじらば有所より夜入る一揆討く事
も何れべし爰一所より下知せしむへしなり藏人少も
あへば作州ハいまじらば後より攻入まじらば藏人ハ一すも敵近
所を好むらわらば後ハ引らば一揆打く出ても藏人爰小

あへば危きまじらばと答へられり勝重より結の丸より
叩く出ば敗北まじらばとて士三十人計鎗を搦て鉄炮をまよ
並べり藏人ハ鉄の楯を取寄前より押し立て夜明け待か
けらまじらば一揆討くゆ信綱下知して勝重も鍋島の陣
よ入らまじらば永純ハいづらば使度くふ及て引くさ
まじらば落城の後三月朔日永純勝重の陣所より本丸の一番ハ
藏人よりまじらば勝重年若くして花の丸本丸の奴原守を限ふ
防ぎらひを美作守父子に討破り旗を一書ふ入
事難くあまじらばと答ふ鈴木も進みゆれば永純まじらば
鈴木がやせし言もいづで忘るべき作州父子ハ一番とわらひく
藏人二番とやせしと分明ありされども旗入をまじらば一所より

とて夫よりさうの跡はひてこそとぞしりし事し 鈴木も旗を
證めし利口をやりし事とあはくは一番ハ藏人うらと云ふ事
ハ勝重きとて陣所に入ればとて旗を一番入るハ是軍の法
ふたゝ誰ハ一二を強き父子が兵ども身を棄て力攻めを取
一本丸を他の一番不定めん事思ひもまらば能思慮しめんと
答へらまふ永純旗の前ハ論せぬ將ともの先づけハ藏
人が外難の作列ハ跡より使をまらりらへハ一番ハ藏人なりと怒り
まらば勝重只今のあはくは無益の事よ軍は慣る物よふ
向く一二を定められへといわれしハ永純おとけく小性を呼び
茶を飲めしけれが鈴木は向ひいふも詞和らげ云く歸られ
しハ藏人もなみくまぬ人なりと答へり

○一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右取より二の丸お
て鉄炮より倒し老れ首を斬り忠利前髪ある首を
えりしを鞭やく彼首をさうし四郎が首もおろし難う
見知りし頃向須佐美権之允四年以前に四郎を召はしり
事の紛ひきたり四郎なりたの耳れ下は痛のん是其の事
とて生捕し四郎が母よんすれば吾子ありと泣倒し
は忠利使をまて首を石谷十藏の方へ送り後
陣ふ千石の禄を興へらる

○鴉原の城攻め細川家の士大将松野龜右衛門井藤より
よ本丸と二の郭れ間小坂有る人集る中ハ大紋の羽織着
る者あり松野指し鉄炮めく打ちし五町よりあて

中よあそりくろりそれより空箭あく打らば彼坂
を夫より後きりく通る老身をかぎめ走り通るを松
野ハ鉄炮の妙手留刑部一火は些少びく妙を得たり

熊本少く一丸の筒をくらた居し小庭の南天蜀れ実をひ
よちの来て喰くをかなりの志をめぐり菜をこく目的
をんぞ著やく火をけしお中らるる事あり係系
の前此事なりし事細川家の長臣南條大膳恨をよむ
故有と細川家を傾んるを謀りく其比深く密す
事ありし泄るは細川家の禍ある事を知んれば先
切支丹の事訴へたり江戸より南條をぬす細川家驚き
まてせん方なり松野我ふまらせらるる囚人あれバ

厚き板ゆく詰牢をきりり醫者一人小密謀を云ふ
熊本より出り小天氣を待りく處る小舟をとめ目を
経る内よ人參の入る薬をのこ朝夕の食物まぐ人參
湯少く飲食させたり南條ハ氣の鬱し上人參數百
斤飲りし心狂乱しり松野江戸にお具し
至りく南條ハ數年狂氣の者よてんとく知りり切支
丹訟の事を問ふ狂言はなりとく熊本小歸り
松野よふされぬ此謀き醫者一人の知り云り
元和五年藤堂高虎領國阿濃津少く俄に勢揃をせられけ
り人或ハ怪しと或ハ高虎何事よ謀反とまきや万が一も反
ありし事を密よまきふりし人のおどろくべし

なすは子細あんとつひに福島左衛門大夫領國を削らまじり

○福島左衛門大夫正則八咫ヶ原の軍功ホより尾張の清洲あり

安藝備後を賜はりたるが物荒く政悪きのなまじり多く毎

罪人を殺し且東照宮不對一奉て無禮多かりければ元和

五年台徳院殿御上京の時領國を削らまじり

本多上野公正純に就く廣嶋の城池を浚ふべき旨を申

申上へまじりを吞へらまじり御上京の事繁き事なれば

其事なかりしに廣嶋の城普請代事を申し召怒らせしに

正純其時發せし正則の書翰をばししに證文の如

し後まじりしに聞し召入らまじりしに

二條の城ゆく土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎をめて此

事を仰出され議決せり

板倉伊賀守勝重此事ハ井伊掃部頭直孝に仰せられよ

しと直孝を召御前より福島左衛門大夫國を召放

しとまじりしに召まじりしに其事をより誰に使わせんと

とつと仰あり直孝京都よりの御使なりバ江戸に殘

まじりしに其の事弁へさしやと事もはべり只今江戸に

罷在る者よ仰出され然るべし又正則を京に召まじり罪の趣仰

かき事し申款あるう又八國より思慮せしと仰られし

ても然るべし事小より直孝を向ひ打破りしと

和泉守若き掃部頭ハ似合しり但福島も内とがの悉

よく剛カウの者モノ多タければ小路軍コウジイキありくといふありとも
直孝チキウ和泉守イヅミノミヤ八何方ヤツヘカタありく小路軍コウジイキありくといふありとも
ハ武功フコウの老武者ラウムシ多タく古コき戦タケの事をすし今川氏真イマカハノサネの許ヨ
よて濱松ハニマツ此城主キイハイト井伊隼人イハサネを氏真ウヂマコトの城下ジヤウカへ召シよす誅セせられ
し時トキ小路軍コウジイキありく殊コトの外ソノむづかりきことと唯タダ一事コトを
すしととバ和泉守イヅミノミヤ詔ミコトノたり 台徳院ダイトクイン殿ノいられざる小
路軍コウジイキの論ロぞとと先退マシイマシ出デせられ井上主計カサノ頭ノを以もつて再マタび
直孝チキウを召シ仰ヨよはらふと思オモひも汝ナニが言コトのいし人ヒトと皆みな
口クチふつひく一同イツドウせば掃カモシ部ノが存スる旨オモひ従シ之ノ一ヒトよと誰タレぞ
使シおせんと仰ヨりし直孝チキウか後の使シ久世キウセ三四郎サウロウ坂部サカベ三十郎サンジロウ
兩人ニヒトよかりあんと存スるべしととせば是コトも符合フイカフせりといふ仰ヨり

兩人ニヒト使シしりかき酒井雅樂頭サカキノウタノ忠世タテヨ太田善大夫オホタノヨシウヂノを近付チカグ
福嶋フクシマ左衛門サエモン大夫ウヂノ領國レウコクを召放シバシしととべきよし仰ヨ出デされしあり
福嶋フクシマハさしものたよりいある事をし仕知シチはべきと危ヤブく思オモふ
ありと語カらまされバ太田オホタいや何事ナニコトうといふべきと事コトもなげ
よりの酒井サカキ又マタいしりものこしちやある詞コトバを危ヤブき事コトと思オモふ
とやされし事コトバ太田オホタなごさる事をす福嶋フクシマはあはれす
べきをさる者モノこそさへいへる事コト福嶋フクシマハ非道ヒドウ不仁フニンの男ヲな
ましん勝負シヤウブの理リをよくさるい男ヲあましバ何事ナニコトも仕出シはじ
といひが果ハし一言イチゴンゆと及および仰ヨの旨オモひを奉オウりしき
六月ムツキ小福嶋コフクシマ領國レウコクを削クらし昔ムネ廣嶋ヒロシマへすえし事コトバ福嶋フクシマ丹波タニハ
諸士シヨシを皆みな呼ヨ集ヒめ預置ヨクエまし城シロをられバ公方クバウに仰ヨりし渡ワタ

一難一又備後守殿為なまきバ渡さるまきと評論と上月文右
進出く人ハいうもあまき我ハ本丸を預りぬる上ハ命あり
ん限ハ入ハ渡さるべしと申切り丹波心得さる氣色あり村
上彦右多聞く福嶋上月兩人の思ふ所ハ同心の面々別く判形
せしまきと申二通書く指ぬ酒井主膳と申丹波が従子
あるが座を立鎌田主殿を呼いふおのぞ丹波ハ伯父あれ
ども上月がらあ尤なりと申バ主殿も上月は同心して判形
をとりまきバ皆是は同心して其時上月人々皆かくの如く
なまきバ丹波が妻子を本丸入らるべきやといハ丹波即妻子を
本丸へ入らるまきよりこれ先きと妻子をまめり城を受取べき
為に諸將うち向まきといハ丹波吉村又右多水野治郎右多

二人を使とて左多大夫領國召放とまきより仰の旨ハ
謹で乗り然まきども主君預置まき城を證據とすまき書
簡たつと渡さん事ハ人の存るやと思ひやまき次ハ領國
に入給らん事あるは若た奴原無礼の恐まき領國をさけら
まきへと申送るまき左衛門大夫ハ程遠く伏見にあき備後守
の書簡を證據とせんやと云せらまき父子と申事ハ論たの
といども備後守が領國を城もあき備後守が言ハ用あふ
まきとてつあまき正則が書簡来りまき城門の大小あて書
簡を受取ぬまき廣嶋ハ船入二所あり人多くあきとて
士どもの妻子退去る時争あきやの恐まきもいまき一方をハ人を
まきめ一方の口より退散まき城中の士ハ門比左ハ付礼服とて並

び居城受取の使安藤對馬守重信ハ城門の右より入りて城に入ら

安藤城門に入時並び居り人々向ひたて居りて

さやうもなると廻をかけらる其時皆礼せし小獨茶筌髪

よく志まみの種木杖をつましく對馬守の詞をゆか

を見く礼しと山崎甲斐守見くたみくあぬ人

なりと知く姓名を問ふ長尾出羽と答ふ山崎退散の後

家族をささぐり又他國より中居居せしとて使

をめぐ云せしれしと出羽甲州の御事ハ兼り及びり

ま旨を謝するやぐ森義作忠政礼を厚く招く

りバ森家又仕へくとなり

丹波と文右衛門ハ密に相討て初より争てあつた

いひ同心する人なれば時ハ別よき道ありて事を二ツ

みし士め心を就しなりと其比いひありけり後

城をもちふ決せし時丹波上月は向ひ吾と文右衛門腹切

バ何事も外よすき事なりといひしとや

左衛門大夫罪せしとて暇を乞はる士三十人あり

ありしは狭間なりといひれり妻子を本丸へ入るハ

諸よりと名付妻子を城外よゆ其身の城をもち

といひハ片龍といふ後小京都耳塚に札を立二色

分ちく姓名をまき世の人よんせしゆゑさゆり

面々ハ餓死よ及びぬといひり上月ハ禄五千石士大将

正則上月が志を感賞し書簡をあへらる今度我ホ事
は新よぬは是よ依る城を搦と存れよし心底おふは然
ども存寄みまゝゆる早く城相渡して平にせよ後志は
不浅るまゝ存れとぞ書まはる大崎玄蕃長行も福
島家の士大将なり同し時大崎ハ備後鞆の城より秋田
下総も同く鞆有しが大崎を廣嶋よりやりて比一人そ
鞆をとり討死して名を揚ばやとや思ひらん大崎よ向ひ
江戸より城を受取べき使近き内は番陣有べしとく廣
嶋よこのれ然るべしと云大崎ゆく殿の下知ある
て城をぬんこと思ひもよめばといふ秋田城中をとり防
戦の支度せしむるなりし大崎ハ柱より眠る外なり

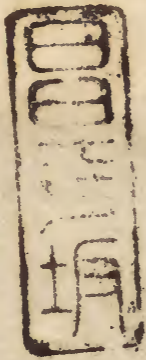
人々大崎をききしききし大崎あざきひ秋田ハかくゆじく
防戦の用意せしむるなりし大崎ハ柱より眠る外なり
事ひまわりしとて其子細を問ふ大崎此城をとり日本
國を敵あゝ一万も捕べきやあゝとて人を殺さるも
いふなりしとて一人大崎北門外へ出く城代大崎玄蕃と申
者たうりしとて腹切ら後城を受取る城の人々結らば守り
らまゝと云く各々その命は換ふべし何れ用意の有べしと
いひたりかゝるおよ正則の證書来り事故なく城を渡せし
うば大崎と村上彦右衛門真鍋五郎右衛門と同日く紀伊の家
よ仕へたり大崎ハ若き村木村常陸少師春の奉公一後正則ハ
仕ふ鬼玄蕃といふなりしとてのなり関ヶ原は時尾州清洲の城

小大崎を奪つたり石田三成大垣の城に入る使を以て福嶋
家ハ大崎の恩篤た人なるとバ今度無二の味方よん清洲を明
らまると兵を入らんともぞきばうりたる津田備中繁元ハけ
あもとあひひく同心すまよ長行事ハいふもせよ殿の仰
あくく他國の兵を城小いん事存もよりのいひはひと兵
を寄らまバ一軍せんとも目を見知く使を罵り退るたり
かくく大崎門を固くもりさまうりてかくく小崎
告うりてバ正則悦ぶ東照宮正別清洲の守り小難有
と仰あり正則大崎の玄葉を留まるとも斯と告来り
々まバざり口大崎ハ世よちまもる老たりさぞあんと
仰らまうり其後も清洲を敵ふとれざりハ大崎が功あり

と度々仰りてはつり紀州もく安藤帯刀大崎村士は
よをく武功を向きりて小真鍋八十四の時より軍を
度の功名をかたり村上も十四竹子此軍より壬生川の先駈
をいひて小大崎ハ日暮木村が許し小楳よとくもり士大將
よなり又福嶋の家も士を下知りてバ左のあふも
いひてはつり巴帯刀大崎がたり又一説は福島正則流
罪藝州へゆきまよバ長臣の老も福島丹波がりて小相
集り城を渡さるべきや否やを論じ村上彦右衛門通清殿流
聚りとも御存生よおいてハ御判形をらんく國を引渡さ
御判形来らば此城を枕し討死の外他事たり但本
丸ハ上月文右衛門預りては上月小談合然るべりといふ上月聞

て御判形を見せしむ。いづれの本丸を渡さるべきとて備後三
次小尾関石見備中境東條は長尾隼人一勝備後三原は太田玄
蕃長行有りと石見隼人をつむりせ廣瀨三原の兩城を守り
各人質を城に入天守は焼草を積大手搦手は持口を定め
安藤對馬守永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ備中
の笠岡は着陣あり丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使し
主君の判形を見せしむ。城を渡さるる迷惑なりし竹中米次
へいひ送まらう上使少く状を取寄べいと返さるるに笠岡は
滞留の不正則の状を來り丹波已下是を見く城を渡さるし
と相定む笠岡より尾道へ八里初八陸路と定めしれを安藤
松平行舟しとらう加藤嘉明聞て上使八船おく早く惣人

數ハ陸少く違ふ上使より遅くバコまらう八男をすてあ
是非陸をとすめららるるも安藤聞入り船の事を蜂須賀
阿波守は相對らる加藤も船を用意しとせえ某の船不
乗らるるすめ此船は乗る上使尾道に到り人数ハ陸を廻
り大崎玄蕃使を以て主君の状廣瀨に來る上ハ三原も相
違はる然もども三原へ狀來らるる城ハ明渡一郡は竹
中のみと云送る安藤聞て跡先の思慮も及ばぬ無二無三
城へ急入上使討死の時爰より城北門際より上使討死せバ續
く老なることいふ有べし只今まづ笠岡は滞留し又爰
日敷を送るべきありと云切らるる加藤允然とて
子息式部少輔の先陣をやら押出さんとするまづ三原の城



へととや正則の状来りたるにバ玄蕃事故あり城を渡りし
 城に入るとバ士足輕の名を書付くさるごとく小配を城の
 隅々まわく掃除し座敷小釜は湯を沸かし茶をひかせ
 翌日廣嶋は著々バ丹波今日渡らばまじや城の中掃除未
 終らば下々の荷物ものけ兼し明日まじやまじやと
 いふ永井は我かひくつまじや有城和平となり渡り
 及く下人の荷物を片付兼し一兩日まじやまじやと荷
 物ハ札を付く大手搦は其まじや出さるべし相當のあは
 は買取んとく城を受取りし其翌日寄手の天将頓死ぬ
 城中のいひはまじやセバ城を持之に變も計りし危き事
 ありと云傳へし唯一刻も早く受えんとく大手へ進め
 繪圖を披き城内の物主どもを呼集め番所寄口を渡り
 城へ入く飛脚をもち此旨言上しありし古き人
 の詞に城は受取渡ハ互に證據をとり唯今事は危むが如
 く心得べし城主進退窮りしはまじやバ慎むべきありとて

